

山水屏風



秦野八勝図



震生湖春漁

弘法庵晚鐘

実朝塚夕照

今年3月上旬、はだの歴史博物館（堀山下）では市制施行70周年記念の企画展「大津雲山展—秦野に生まれた南画家—」（3月29日～5月25日）の準備が進んでいた。10年ぶりの開催となる雲山展は、博物館が所蔵する

中国的「南宗画」の略語で、江戸時代に伝来した南宗画をもとに日本独特のものとして生まれた「南画」。その世界で脚光を浴びたのが秦野出身の画家、大津雲山（1885—1971）である。太平洋戦争以前は東京で活躍し、戦争が激化してからは故郷秦野へ疎開。戦後は秦野で多大な足跡を残した“ローカルスター”大津雲山に迫る。

南画家 大正天皇御前で揮毫も

掛け軸や屏風、色紙作品で構成が練られていた。しかし、開幕に向けて企画展が周知され始める。と、市民から連絡が寄せられるようになった。

「うちにも作品があるからよかつたら使って」

展示を担当した市職員の小林巧さん（31）は、「大津雲山が描いた絵の掛け軸など市民の方から3、4点をお借りして、急ぎよ展示に組み込みました。企画展をやつてみて、市民が大津雲山に愛

着を持っているのを知ることができるよかつた」と振り返る。

東田原生まれ地元画家に師事

雲山は、1885(明治18)年に大住郡東田原村(現在の秦野市東田原)に生まれる。本名「市造」。菩提寺の金剛寺(東田原)に仏弟子として入門し、住職から雪舟の逸話を聞き画家を志すように。初期は、地元の南画家の山田永耕や森崎和三郎に教わった。

上京後、小室翠雲や松林桂月といった著名な画家に師事。その桂月から、故郷の雨降山(大山)に由来する「雲山」の名を授かる。頭角を現していく雲山は、1917(大正6)年に天皇の御前で揮毫し腕前を披露。「帝展」など当時の代表的な公募展でも多くの栄賞を受けた。

そんな自覚ましい活躍を見せていた雲山。「戦前は中央で勝負していたが、戦争によって活動が変化していった」とは

れるべく、1945（昭和20）年、雲山は生まれ育った秦野へ妻とともに疎開。息子は戦死し、妻も直後にこの世を去つた。人生の大きな転機を迎えた雲山だったが、地元の支援者の存在もあってか故郷で創作を続けていく。

秦野生まれの南画家 大津雲山



年号	満年齢	出来事
1885(明治18)	0	1月29日、大住郡東田原村(現・秦野市東田原)にて大津角次郎の四男として生まれる。本名は市造。
1891(明治24)	6	菩提寺の金剛寺に仏弟子として入門。住職から雪舟の逸話を聞いたことで、画で身を立てる決心をする。
1893(明治26)	8	秦野在住の南画家・山田永耕に師事。
1899(明治32)	14	秦野在住の南画家・森崎和三郎に師事。竹外の号を授かる。
1911(明治44)	26	松林桂月に弟子入り。故郷の雨降山(大山)に由来する雲山の号を授かる。
1917(大正6)	32	大正天皇御前揮毫。
1921(大正10)	36	第3回帝展に「山水図」を出品。
1945(昭和20)	60	太平洋戦争の激化に伴い、郷里秦野に疎開。一時金剛寺に身を寄せ、後に尾尻へ転居した。
1951(昭和26)	66	同好の士と漢詩同人会「南秦吟社」を創立。
1971(昭和46)	86	4月22日逝去。金剛寺に葬られる。

